

# 落合地域振興計画

～観光地域づくりに向けて～



令和3年3月

真庭市落合振興局

# 目 次

## 計画の目的

落合地域振興計画策定の目的

## 第1章 落合地域の概要

- (1) 自然及び地理的条件
- (2) 社会的条件
- (3) 地域の特性

## 第2章 真庭市の関連計画と取組

- (1) 第2次真庭市総合計画
- (2) 真庭市観光戦略アクションプラン

## 第3章 落合地域の現状と課題

- (1) 関係人口
- (2) 地域資源
- (3) 交通アクセス
- (4) 市内への普及
- (5) 課題

## 第4章 落合地域の具体的な取組

- (1) コンセプト
- (2) ターゲット・スタイルの考え方
- (3) 方針
- (4) 意見の集計結果

## 第5章 取組

- (1) 具体的な取組

## 第6章 経済波及効果

- (1) 地域における経済波及効果
- (2) 市内への経済波及効果
- (3) 市内への波及効果（地域振興）



## 計画の目的

### 落合地域振興計画策定の目的

平成 17 年 3 月の合併以降、地域の特徴や強みを活かした取組が強く求められるようになった。

そのような中、落合地域では生活の中で長い間育て護ってきた豊富な『地域資源』を地域の強みとして活かす取組が盛んに行われてきた。

特に近年、中山間地域の山間部では、「人口減少」と「少子高齢化」が進み、地域を持続する事が困難になるという「危機感」が特に大きくなっており、住民自らが主体となった取組を進める動きが始まっている。この動きを促進するため、地域外の方や様々な世代等との積極的な交流から新たな視点や感性を取り入れる支援を行い、住民が主体の取組を推進する。さらにこのような取組から明らかとなった地域課題を改めて検討し協議を深めることで、課題解決に必要な重点施策を抽出し、事業を実施するために、『落合地域振興計画』を策定する。

また、真庭市観光振興計画との整合性を図り、SDGs の理念のもと 17 分野の目標に照らし合わせながら、住民が幸せに暮らせる持続可能な地域となるように、『主役は住民』として担い手を育成しながら、住み続けられるまちづくりを推進する。

## 第 1 章 落合地域の概要

### (1) 自然及び地理的条件

真庭市南部に位置し、東西 19.6 km・南北 17.2 km で、面積は 147.92 km<sup>2</sup> で、真庭市内では最大の面積である。

周囲を山々に囲まれた中山間地域であり、約 600m 級の山々が並び、平地は、一級河川の旭川と備中川及びその支流に沿ってひらけ、標高は約 125m 前後で、約 400~500m の地域に集落が点在している。

全体面積の約 70% 以上を森林が占めており、その約半数が杉や檜の植林である。主な産業は、農業と林業で、気候は、四季を通じて比較的温和であり冬期の降雪も非常に少ない地域である。

豊かな自然に恵まれており、全国的にも有名な「醍醐桜」や各地区の四季折々に咲く花々、樹齢が数百年といった木々も多く残されている。

このように地域の人の手により護られてきた自然に囲まれた、恵まれた地域である。



### (2) 社会的条件

#### ① 落合地域の沿革

【明治 22 年 (1889 年)】

- ・ 真島郡垂水村と向津矢村が合併し落合村が誕生

【明治 30 年 (1897 年)】

- ・ 町制施行により落合町が誕生

【明治 37 年（1904 年）】

- ・ 落合町と瀬田川村、天津村が合併

【昭和 30 年（1955 年）】

- ・ 6ヶ町村（落合町、津田村、木山村、美川村、河内村、川東村）が合併し「落合町」が誕生

【平成 17 年（2005 年）】

- ・ 9つの町村が合併して真庭市となった

※平成 17 年（2005 年）の合併当時の人口は、約 15,600 人で、現在令和 3 年（2021 年）の人口は、約 13,300 人であり、人口減少が進んでいます

## ②教育環境

保育園・こども園から高等学校までの教育機関があり、一貫して教育を受けることができる環境が整っている。しかし、大学へ進学する場合は、多くの生徒が真庭市を離れることとなり、そのまま就職・定住し、Uターンに繋がらず人口減少の大きな要因となっている。

## ③医療福祉環境

病院・医院・診療所等の医療機関が多く開設している。総合病院もあり、緊急時の医療体制や産婦人科、小児科もそろっている。

老人福祉施設もあり高齢者向け施設の環境も整っている。

## ④交通環境

道路については、高速道路の IC があり東京・大阪方面等からの高速バスが直接到着するなど、暮らしやすさの重要なコンテンツの 1 つとなっている。

鉄道については、JR 姫新線の駅が 3 カ所あり、多くの学生が通学の足として利用するとともに市内外からの観光客等にも利用されている。

市内交通は、コミュニティバス「まにわくん」が管内を走っており、地域の重要な交通段の 1 つとなっている。

## ⑤観光資源

年間約 3～4 万人の観光客が訪れ、全国的に有名な「醍醐桜」がある。

また、「木山寺」や「木山神社」等には、紅葉の時期に多くの方が訪れる。

花が有名な名所「普門寺」のある上田地区には、年間約 2 万人以上の方が訪れる。

上河内東谷地区の石楠花や梅園の落合総合公園、川東公園の彼岸花など、四季折々の花を楽しむ名所が点在している。

## (3) 地域の特性

落合地域は、医療機関や老人福祉施設が充実し、教育環境は就学前から高等学校まで一貫して受けることができる。

また、交通については高速道路や高速バス、JR 姫新線もあることから市外・県外からのアクセスも容易である。

医療機関は、総合病院、医院、歯科医院がそれぞれ複数あり、診療科目も産婦人科、小児科、精神科など多岐にわたる。老人福祉施設は、特別養護老人ホームや短期入所施設、また障がい者施設や事業所が複数開設している。

教育環境は、こども園4園、保育園1園（令和3年4月からこども園となる）、小学校6校、中学校1校、高等学校1校で、一環して教育を受けられる環境が整っている。

子を産み育て、教育を受け、医療機関や老人福祉施設が整備されている、人の一生を通じて住みやすい環境が整う地域である。

また、交通機関として昔から河川交通の高瀬舟を利用した物流の交流地点として栄えてきた歴史がある地域である。

鉄道は、明治31年岡山－津山口間が開通し、大正12年津山口－美作追分間、大正14年中国勝山まで開通し、より津山や岡山あるいは京阪神との結びつきが強くなり、中世以来の高瀬舟は姿を消した。

道路交通は吹田市から下関市までの中国自動車道が建設され、昭和50年に落合インターチェンジが完成し、「水と緑・ハイウェイのクロスする町」として発展した。

平成4年には岡山自動車道と米子自動車道が完成し、高速バスの開通により、関西圏、関東圏からの結びつきが非常に強くなった。

## 第2章 真庭市の関連計画と取組

### (1) 第2次真庭市総合計画

真庭市では、市の最上位計画として2015年に「第2次真庭市総合計画」を策定（2020年12月改訂）している。同計画では「誇り」「許容性」「持続可能性」「安全安心」「教育」を基本理念とし、市民一人ひとりの多彩で豊かな生活を重視した「真庭ライフスタイル」の提案を行っている。また地域・観光振興に関して、「多彩で循環性のある持続可能なまち」を目指し、「多彩な地域の個性を育てる」「地域資源を活かした「回る経済」を確立する」ことを示している。

#### 第2次真庭市総合計画における地域・観光振興に関する記載（例）

##### 第5節 多彩で循環性のある持続可能なまち

##### 第1項 多彩な地域の個性を育てる

【施策の方向性と目標】

- 真庭市の自然、歴史、文化などを見つめ直し、維持保全し、伝承し、地域資源を活かした魅力的なライフスタイルを提案していきます。
- 「ひと」と「ひと」、地域と地域の交流により、互いの魅力を認め合うことで、各地域にあった魅力的なライフスタイルが市民の手でつくられていくよう支援します。
- 地域資源を見つめ直し、「掘り起こし（発掘・創出）」や「磨き」「連携（組み合わせ）」により、地域の活性化を進めます。
- 「ひと」と「市役所」が、交流や連携を通じ真庭市への誇りや愛情を持ち、一体となつてさまざまなメディアを活用した情報発信に取り組みます。
- 自然環境や里山風景を将来に継承していくため、里山の担い手を育成していきます。

##### 第2項 地域資源を活かした「回る経済」を確立する

【施策の方向性と目標】

- 農林畜産物や景観、文化、伝統などの地域資源を組み合わせた新しい観光の取り組みを支援し、「回る経済」の中の産業として強化します。

（出所）真庭市「第2次真庭市総合計画」

## (2) 真庭市観光戦略及びアクションプラン

真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟（現：一般社団法人真庭観光局）では、市の観光誘客数が低下傾向にあり、基幹産業の一つである観光産業のより一層の活性化が必要であることを踏まえ、2017年に「真庭市観光戦略」を策定している。同計画では「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりを観光振興の基盤に据え、「市民が誇りに思える観光」「回る経済の仕組みの構築」「地域間の相乗効果」等を方向性として示している。

### 真庭市観光戦略の概要（抜粋）

<b>●真庭市のあるべき姿、ありたい姿</b>
① 自己実現を果たし、社会で活躍する生き生きとした「人」がいること。 ② 豊かな「自然」と人とが共存する循環型の暮らしがあること。 ③ 市民が地域に「誇り」をもっていること。 ④ 顔の見える人と人との関係があり「風通しの良い」地域社会であること。 ⑤ お互いの関係により、地域社会が「安心・安全」であること。
<b>●真庭市の地域課題を解決する「観光地域づくり」への期待</b>
① 観光・交流により市民の活躍の場ができ、住民同士のコミュニケーションも活発になる。 ② 地域の魅力を市民が再認識し、若者流出抑制が期待できる。 ③ 「回る経済」の仕組みを構築する。 ④ 旅行者への演出の取組を通して、住環境や景観が維持・改善される。 ⑤ 広範囲に及ぶ取組を通して相乗効果が生まれる。
<b>●独自の価値を活かした「観光地域づくり」を進めるための具体的計画</b>
① 地域の魅力（独自の価値）の再認識とブラッシュアップ ② 地域の魅力（独自の価値）の発信 ③ 旅行者（お客様）を滞在・回遊させるための工夫 ④ 「観光」を産業にする工夫 ⑤ 受入環境整備

（出所）真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟「真庭市観光戦略」

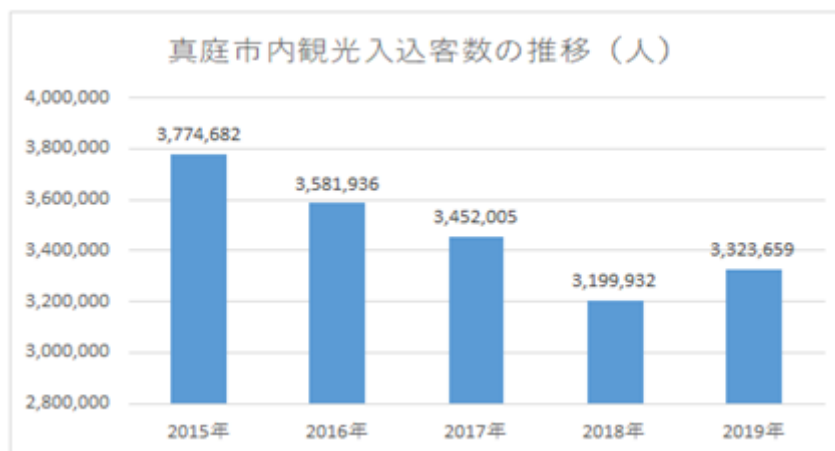
さらに観光戦略を推進するためのアクションプランを策定しているが、その中では、「RESAS」や「観光予報プラットフォーム」等のビッグデータを活用し、観光客の動向を把握し、分析のうえで対応策を検討している。過去5年の推移を基に現状をした結果は次のとおりである。

### 【真庭市の観光客の動向】

#### ①観光客数の推移

真庭市が独自で集計した観光客入込客数調査によると、2015年に377.5万人であり、うち蒜山地域に250万人（66.3%）、勝山・神庭の滝に27万人、落合・醍醐桜に27万人、湯原・湯原温泉に38万人が訪れていた。しかし、2019年には332.3万人となっており、5年間で約45万人が減少している。要因としては、2018年は7月豪雨災害、全体的には、国内の人口減少といった社会的状況や団体旅行から少人数旅行といった旅行形態の変化などが考えられる。

【図1】真庭市内観光入込客数調査の推移

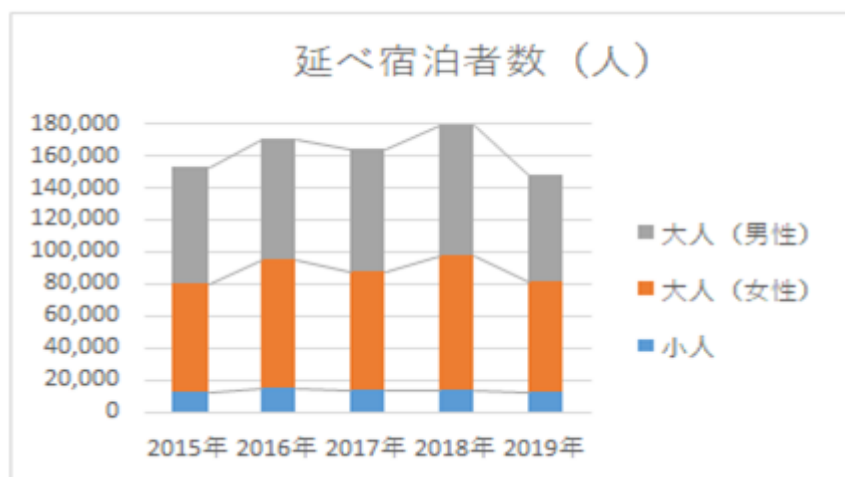


【出所】真庭市観光入込客数調査（独自調査）

### ②市内宿泊者数の推移

真庭市内への観光入込客数は減少しているが、宿泊者数の落ち込みは大きくはない。豪雨災害のあった2018年には、復興に関するイベントが行われたため宿泊者数が増えた。

【図2】延べ宿泊者数

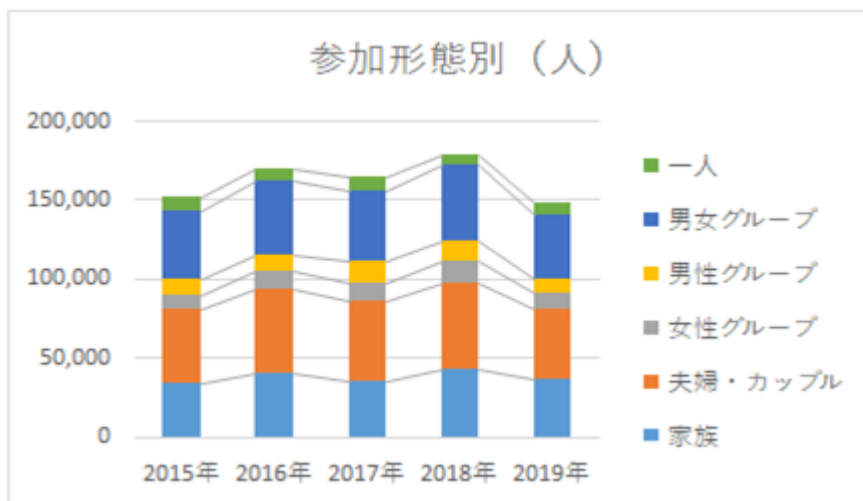


【出所】観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」

### ③形態別宿泊者数の推移

宿泊者を形態ごとに分けて見ると、宿泊のできる観光地が、蒜山、湯原温泉であることから、家族や夫婦・カップル、男女グループでの来訪が多い。

【図3】形態別宿泊者数

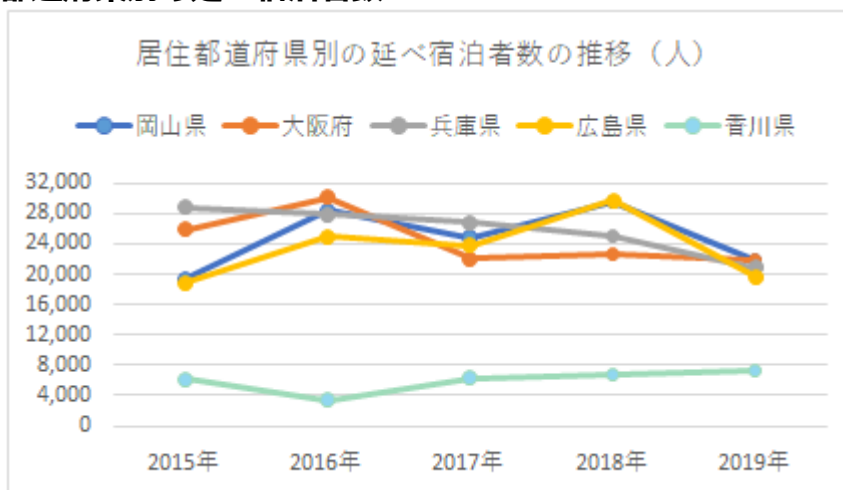


【出所】観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」

#### ④発地別の宿泊者数

真庭市内に宿泊した人の発地上位5県は、大阪、兵庫、広島、岡山、香川となっている。2015年から2017年までに上位にいた大阪、兵庫といった関西圏が低下しており、伸び悩んでいる傾向にある。

【図4】居住都道府県別の延べ宿泊者数

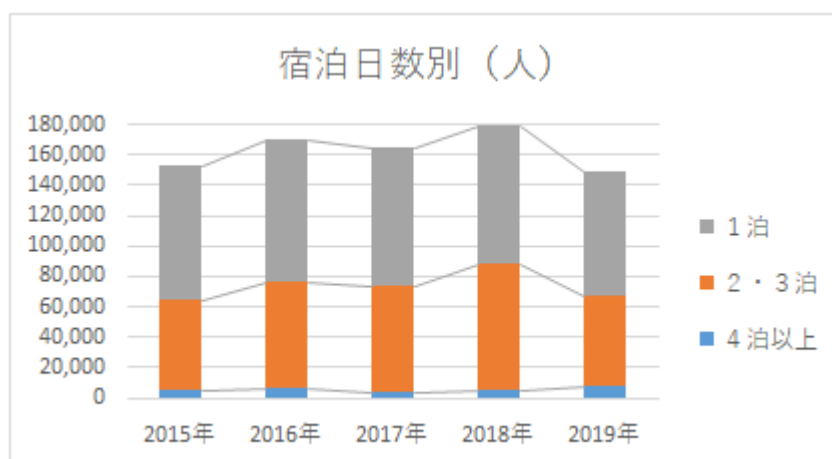


【出所】観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」

#### ⑤宿泊日数

これまでの宿泊者の推移から、旅行形態が家族連れであることで週末を利用した1泊の旅行者が多い。

【図5】宿泊日数別



【出所】観光予報プラットフォーム推進協議会「観光予報プラットフォーム」



観光客の動向を見ると、真庭地域は、近隣の家族が1泊で旅行が楽しめる場所として選ばれていることが分かる。これからは、各地域が有する自然環境や歴史・文化・産業など多様な地域資源を、景観や伝統行事、食文化などに細分して特産品の開発や、滞在交流プログラムの商品化を一般社団法人真庭観光局を推進母体として、行政と共に作り上げていくこととしている。

そして、それを求める旅行者が滞在し、旅行者へのおもてなしが地域内での消費を生み、地域の活性化にもつながるよう検討を重ねていく。

また、真庭市観光戦略アクションプランと地域振興計画に記述する取組については、整合性のとれたものであり、真庭市の観光戦略上、重要な位置づけを占めるものである。

## 第3章. 落合地域の現状と課題

### (1) 関係人口

落合地域には、観光協会といった観光客を専門的に受け入れ等を検討する機関が無く、地域の住民が主体となり、振興局と協働でおもてなしを行っている。

観光客数は、年々減少傾向であったが、旧上田小学校の利活用が始まった上田地区では、令和元年度の観光客は飛躍的に増加した。

現在、観光客を観光だけで終わらせることなく、関係人口につなげる取り組みを各地区で進めている。

新しい地域の魅力を発信することにより、観光を入口として、多くの方がその地域を訪れ、その地域を知り、交流やライフスタイルを体験する。という新しい時代へ向けて、より多くの方に落合地域を訪れるような取り組みを進めて、「観光地域づくり」は、その地域を知ること、再び訪れる人が増加し、一過性の観光客ではない、関係人口となる人を呼び込むことにつながる。

住民が主役となり地域の魅力発信に取り組むことで「観光」を「地域づくり」につなげる「観光地域づくり」という新しい「住んでよし、訪れてよし」の滞在し、交流する取組を進めていく。

### (2) 地域資源

落合地域の地域資源で1番にあがるのは、全国的に有名な樹齢約1,000年と言われている「醍醐桜」である。ここ数年減少傾向にあるが、年間約30,000人の観光客が訪れる最大の地域資源である。

花の山寺と呼ばれる「普門寺」は、季節毎にさまざまな花が咲く場所である。四季桜、石楠花、紫陽花、ゆうすげ、四季桜と紅葉の時期に合わせ、住民によるおもてなしが行われる。廃校となった旧上田小学校の利活用が始まった相乗効果もあり、観光客が大幅に増加している。

木山寺周辺も紫陽花、睡蓮、紅葉の時期には多くの観光客が訪れる。

吉地区は、地域内の縁起の良い地名に着目し、地域活動に繋げる取り組みが始まり、今後が期待される。

落合地域各地で、地域を改めて見直すことで新たな魅力を発見し、地域活性化のきっかけとなっている。

今、真庭市を訪れる観光客の中には、観光地を訪れて見るだけでは物足りなさを感じている方もいる。訪れる方のニーズに応えるように、地域の生活や営みの体験や住民と交流することを含めて観光地域づくりを考える必要がある。

地域住民自身が、とても重要な地域資源であり「観光地域づくり」の主役である。

### (3) 交通アクセス

落合地域には、中国自動車道の落合 IC があり、関西圏からは車で 3 時間程度の所要時間で到着できる。

また公共交通機関として東京や大阪、県南から高速バスの定期便や JR 姫新線の駅が 3 駅あるなど交通アクセスの便利な環境である。

市内交通については、駅やバス停からタクシー又は、コミュニティバスの「まにわくん」を利用して地域を周遊できる。

### (4) 市内への普及

地域住民の取り組みにより、落合地域を訪れる人が増加している。

また、訪れる年齢層の幅が広がり、今後の取り組み次第で移住定住に繋がることが期待できる。

落合地域の滞在期間や時間が増えることで、地域の経済効果を大きくし、新たな産業、生業が生まれ、交流・関係人口から移住定住人口に繋がる。

この効果は、落合地域から真庭市内の各地へ広げること重要である。

真庭市を訪れた方を真庭市内の他の地域への周遊へ繋げて行く。

落合地域だけにとどまらず真庭市内全体へ効果が及び、交流・関係人口から移住定住人口に繋がり、人口減少をさらに緩やかにできる可能性がある。

各地域の取り組みの点を横に繋げ、線となり、その先の面にすることが、真庭市内全体での「おもてなし」の意識の向上と広がりに繋がる。

### (5) 課題

落合地域は、山間部と中心部等では課題が異なるため分けて検討するものと共通する課題があり、それぞれの特性を検討する必要がある。

#### ○それぞれの課題

山間部は、集落が点在し地域を維持することが非常に深刻な課題である。少子高齢化や過疎が非常に進んでいる為、コミュニティの形成が今後困難となる可能性がある。空き家が増え、買い物や病院等へ行くための地域の足も大きな課題である。

中心部は、商店街や街中で空き店舗や空き家が増え、空き地になっている場所もある。街を歩いている人も少なく、中心部の空洞化が進んでいる。少子高齢化は山間部ほどではないもののかなり進んでおり、また人口減少も同様に進んでいる。

#### ○共通の課題

担い手不足が大きな課題である。

持続可能な地域となるためには、次の時代へ人をつなげる担い手が必要不可欠である。

また、真庭市内で1番人口が多いことが要因の一つになるためか、住民の危機感や地域づくりへの関心度が希薄な傾向にある。

危機感を感じて動き出している人と、そうでない人とのギャップが非常に大きい地域と言える。

## 第4章 落合地域の具体的な取組

### (1) コンセプト

観光等で訪れた方を観光だけで帰ることなく、「観光地域づくり」の一員とする政策として、2点に重点をおき取り組む。

#### ①山間部の交流・体験・学びによる関係人口の構築

地域内の生活や営みを体験し住民と交流することで、地域の魅力を最大限伝え、交流・関係人口の増加に繋ぐ。山間部を中心に、持続可能な地域、幸せに住み続けられる地域とするために、住民自身が主役となり、新たな視点で地域の良さを見いだす取組等を行う。

#### ②中心部のまちづくり

『人が歩いている(歩ける)街』を目指して、住民や企業、行政や真庭高等学校など、さまざまな立場の人が集まり、中心部のまちづくりを考える意見交換を行う。

一つの手段として、空き家・空き店舗の利活用を進め、街に明かりが灯ることが地域の活気に繋がるため、『交流』『体験』『学び』をキーワードとし、様々な人が、様々な視点から意見を交換し、協働で取り組む、地域住民が主役のまちづくりを進める。

### (2) ターゲット・スタイルの考え方

落合地域は中山間地域で、山間部にも多くの居住場所がある。地域課題は少子高齢化であり、人口減少も非常に深刻な状況である。この課題に対して、より効果的な取り組みを実施することが急務である。

地域の良さを残しつつ、新しいライフスタイルを取り入れ、持続可能な地域へ繋げることが必要である。

若い世代やファミリー層をターゲットとして、関係人口を増やし、移住定住に繋げ、さらに地域の担い手となることで、地域を次の世代に引き継ぐことが、落合地域全体の活性化につながる。

### (3) 方針

地域づくりと観光を繋げる橋渡しを行い、地域住民が主役となり、地域課題を考え、自ら解決に向けて進むように強力に支援を行う。

地域以外の視点の取り込みが重要であることから、大学生やさまざまなスキルを持った方と地域を繋げ、地域力を少しずつ上げながら課題解決を進める支援を行う。

## (4) 意見交換の実施

『落合振興計画』を策定するに当たり、より広く多くの意見を参考とするためにアンケートを実施した。

アンケート対象者は 真庭市立落合中学校と岡山県立真庭高等学校の生徒、及び真庭市在住の16歳以上の中から無作為に選んだ1,000人を対象に実施した。

### アンケート回答数

- アンケート(落合中学校中学生回答数：299人)
- アンケート(真庭高等学校落合校地普通科及び看護科生徒回答数：209人)
- アンケート(一般回答数：314人)

### ◎落合中学校アンケート結果について

落合地域を進学や就職等で一度は離れても、Uターンして住みたいという回答が、6割弱と高い水準となっている。理由としては、家族や友達の存在が大きく影響している。

将来の住みたい街は、遊ぶところやおしゃれなショップ等若者らしい回答が3割で多く、災害が少ない・働く場所がある等の生活に直結する回答が3割あった。

また、夢を叶えられる街という回答が2割あった。

“落合地域の魅力は”との質問に、「自然が豊か」「静かな街」「醍醐桜」と、自然環境を魅力と感じている意見がかなりの数を占めた。

また、街を元気にしたい取組には、4割の生徒が関心があるとの回答があり、若い力が発揮できる環境を整える事が必要である。

“将来どんな街にしたいか”の質問には、大きなショッピングモールや遊ぶところ、おしゃれなカフェ、ショップ等がある街などの発想や、自然豊かな街やゆっくり過ごせる街などの自然が多い真庭市らしい暮らしが大切との意見が多くあった。

### ◎真庭高等学校のアンケート結果について

中学生の回答から変わり、少し現実的な回答が多くあった。

進学等で落合地域を離れるとの回答は約7割あり、Uターンして住みたいという回答が約3割であった。わからないという回答は半数を占め、高校生の段階では決めかねている傾向がうかがえる。

まちづくりについての関心度は5割あり、地域へ貢献することの重要性を感じている生徒が多い事がわかる。

何か取組があれば参加したいとの回答も4割を越え、より地域への関心が強いといえる。

落合地域の魅力について、自然が豊かがほとんどの意見を占めていた。

“こんな街にすみたい”では、働く場所がある、起業できる等の回答が約4割となった。中学生より、地域や仕事を意識した回答が目立った。

### ◎真庭高等学校看護科のアンケート結果について

看護科は、落合地域内と市外・県外の出身者の割合が約半数ずつの回答であった。

卒業後は、進学や就職で落合地域を離れるとの回答は、8割あり、その内Uタ

ーンすると回答した生徒は、約 2 割であった。U ターンしない理由は、都会に住みたい、生活が不便等の意見が 6 割を越えた。

“どんな街に住みたいか”の問いには、働く場所や起業できる街に住みたいが 4 割以上あり、仕事の重要性が目立つ結果となった。

地域づくりの取組について興味があるは、約 2 割強にとどまっている。

理由としては、勉強や余裕が無いとの意見が約 5 割であった。

落合地域の魅力については、自然が多いことがほとんどの意見であった。

“私が市長ならどんなことがしたい”という質問には、カフェやショップがある街にしたいと、落合地域に少ない物を見抜いた回答であった。

## ◎一般の方のアンケート結果について

落合地域在住で、さまざまな職種で多世代に渡る約 3 割の方から回答があった。

落合在住年数も 15 年以上が約 8 割以上と長く住んでいる方が多い。

その中で、一度は落合地域を進学や就職で出て暮らした経験のある方が約 8 割を越えた。U・I ターンしてきた方の約 5 割は婚姻と就職が理由であった。

落合地域の魅力は、自然の豊かさやゆっくりと静かに暮らせるが約 5 割あり、災害が少ないや医療機関が多いといった意見が 3 割だった。

落合地域に住み続けたいと回答した方は、約 5 割を越えており愛着を持っている方が多く住んでいる結果となった。また、まちづくりに興味があると回答した方は約 5 割であった。

落合地域は、自然の豊かさが魅力と感じている方が多く、また地域の人のおしさや助け合いにも魅力を感じている意見が多かった。

このアンケートでは、落合地域についてさまざまな意見が寄せられた。住みやすく・子育てしやすい、地域の繋がりが強すぎてプライバシーがない、逆にちょうど良い田舎感であるとの意見があった。

また、未来の落合地域のまちづくり・観光についても多くの貴重な意見が寄せられた。大型商業施設の誘致やカフェ等がある街にしたい、若い人がチャレンジできる・楽しめる地域ができれば良い、若い力が必要と考える意見が寄せられた。

## ◎アンケートの全体的な結果について

中学生から一般の方までに共通するのは、落合地域の自然豊かで、静かでゆっくりと暮らせる「ライフスタイル」に良さや魅力を感じている点である。

また、高校卒業後は、多くの方が進学や就職により落合地域から離れた暮らしを選択していることや、現在在住の方も一度は落合地域を離れてUターン等していることは、今後の政策の1つのきっかけになる回答であった。

多くの方が落合地域に愛着を持ち暮らし、地域に関心を持っている意見が多く、今後の地域活性化の礎になることが期待される。

このアンケートの結果をもとにまちづくりに興味を抱いている方を募り、さまざまな場面で情報共有し、地域と行政が協働で話し、取組める場をつくり、落合地域の地域課題の解決や活性化につなげていく。

※アンケートにご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

## 第5章 取組

### (1) 具体的な取組

第4章(1)コンセプトで挙げたとおり、山間部と中心部では状況が大きく異なる為具体的な取組についても、2つの地域条件に分けて推進する。

#### ①山間部の交流・体験・学びによる関係人口の構築

- ・真庭市吉地区の地域活性化活動の支援

吉地区では、縁起の良い地名が多いことに着目し、唯一無二の活動として任意団体「吉縁起村実行委員会」を設立し取り組みを始めた。

古くからあった休憩所をD I Y等でリノベーションし、住民自らが最初の地域の拠点を整備した。また、空き店舗を同様にD I Yし、「立寄処」を開設、地域の交流と訪れた方の居場所として準備が整った。

今後は、地域への人を呼び込むことにより交流や関係人口の増加につなげる。

まず、地域の誇りとライフスタイル等の魅力を発進し、人と小さな経済が循環する地域となる取組を新たに模索する。

- ・真庭市別所地区の地域活性化活動の支援

全国的に有名な「醍醐桜」を新たな視点で活用する。空き家をリノベーションしてシェアスペースにする取組と旧別所小学校の利活用の取組準備も始まった。

今後は、桜シーズンのみの観光ではなく1年を通じて訪れて交流が出来る体制を構築する。さらに人と人が交流することで、関係人口の増加と担い手への育成につなげる。

- ・真庭市上田地区の地域活性化活動の支援

UEDA VILLAGE や普門寺、上田村おこしの会が協働で、多くの人に訪れてもらえる交流・体験できるメニュー開発の体制が整いつつある。

地域では、訪れた方が交流等をとおして関係人口になっている。今後、どのように新しい担い手として繋いでいくかが大きな課題である。

関係人口から担い手の育成に繋がるよう、更なるメニューづくりなど継続した地域支援を行う。

#### ②中心部の地域活性化活動の支援

落合地域の中心部は、空き店舗が街中や商店街にあり、空き家も増加している。

地域でも空き家等の利活用等の勉強会を開催し、この問題に取り組んでいる。

街の空き家や空き店舗に明かりが灯ることで、雰囲気は大きく変化することがある。これまで中心部では、ゆーまにわや地域おこし協力隊、真庭高等学校、まにわ・しめ山プロジェクト等の活動により少しづつ明かりが灯ってきた。

今後も、明かりが灯り、人が歩く町並みが続くことを目標に掲げる。そのためには、真庭高等学校や地域活動に興味のある人等と協働しながら新たな地域の担い手の育成を図る。

#### ③旭川・りんくるラインを活用した取り組みについて

勝山・久世・落合を結ぶ「旭川・りんくるライン」が完成し、現在も自転車愛好家や散走サイクリング、散歩やランニングにとまった市民の憩いの場として親しまれている。

この3つの地域をつなぐ「りんくるライン」を人が繋がるコンテンツとして、勝山・久世・落合で連携し、活用していくとともに地域の担い手の育成を行う。

## 第6章 経済波及効果

### (1) 地域における経済波及効果

山間部を中心に地域活性化のさまざまな取り組みを行いながら、地域内での循環型経済の仕組み作りを進める。

小さな循環型経済の拠点を整備し、運営する仕組みができることで、地域に人が訪れるきっかけとなる。

そして、持続可能な地域と経済が生まれ、生業の一つになり、今後地域経済をつなげて行くことができる住民が主役となる仕組みを作り、継続できるように行政も支援し観光地域づくりを進める。

### (2) 市内への経済波及効果

落合地域内で、小さな循環型経済の拠点が增多することで、観光と地域活性化が観光地域づくりへつながり、滞在時間・期間の延長が期待できる。

これらの滞在している人を市内各地への誘客により、人の流れを作る。この人の循環が経済の循環につながり、落合地域から市内へ経済の波及効果が期待できる。

### (3) 市内への波及効果（地域振興）

地域住民一人一人が主役となり、地域の課題解決に取り組むことが持続可能な地域となる力になる。

地域内で取組に応じて築くことができる関係人口は、市内に地域課題の解決に大きな役割を担う効果がある。

各地域間で、情報と人材の共有を進め、点と点をつなぎ、面として地域振興を考える事が大きな活性化につながる。

住民の活躍が、さらなる住民の活躍を生み、笑顔で住み続けられる地域になるよう観光地域づくりとしての活動の推進と支援を行っていく。

晴海プロジェクトにより、蒜山を入口とした観光客が増えることになり、その観光客を落合地域に繋げるには、地域間の連携を強固にする必要がある。蒜山地域から落合地域へ一度に周遊することは観光地域づくりの観点からすれば、湯原地域・勝山地域を一旦、経由することが必要である。真庭市南部に位置する、落合地域や北房地域が連携し観光客が周遊出来る仕組みを構築する必要がある。

落合地域は地域資源が少なく、受け入れる核組織もないことから、地域と行政が一体となって、少ない地域資源を活用し、交流・関係人口につながる「観光地域づくり」を進めて行く。

『主役は住民』、「地域資源は人」を前面に押し出し、地域の魅力の発信と担い手の育成を強力に推進する。